同窓会報 千南原

第７号

昭和55年6月22日発行

編集・発行

藤枝市天王町1丁目7−1

静岡県立藤枝東高等学校

同窓会事務局

「同窓会基金募集」事業の完遂を

同窓会長　松　永　　臻

藤枝東高等学校同窓会の皆さまがたにご挨拶申しあげます。

槇田前会長が一昨年突然逝去され、その後任として昨年七月皆さまがたからご推挙をいただき、伊村副会長はじめ多くの方々の深いご理解と絶大なご協力をいただき一年間同窓会長を勤めてまいりました。その間、「同窓会基金募集」の事業はもとより、昨年末にはサッカー部の全国選手権大会の出場につきましては、格別なご協力ご援助をいただきありがとうございました。ここに厚くお礼申し上げます。

藤枝東高同窓会も日に日に発展し、現在一万一千余名の会員と運動場脇に立派な同窓会館を有しております。また同窓会員のあるものは地元において、あるものは県外さらに海外においても有為な人材として活躍をいたしております。また母校も益々発展し、大学受験の合格におきましては県下五指に数えられ、一方サッカーをはじめとする部活動においても好成績をあげ、今や県下に燦たる名門校としてその名を轟かせております。

こうした母校の教育諸活動を後援すべく、去る昭和五十二年に槇田前会長のはじめられた「同窓会基金募集」の事業はその後順調に進み、本年六月現在で一千六百余万円に達し、目標額の二千万円にいま一歩のところとなりました。その間、一昨年の夏にはサッカー部とバスケット部、昨年夏には剣道部が夏の高校全国大会に出場、別途に格別なご協力をいただきましたので、「同窓会基金募集」を中断したこともございましたが、役員の方々はじめ皆さまがたのご尽力により、着々とこの事業は進められ、今日の成果をみるに至りました。

志太中時代の方々はもちろんのこと、藤枝東高校になってからの若い卒業生の方、地元といわず全国各地の方々がご賛同くださり、五年間乃至三年間を千南原の学び舎で過ごした同窓生の強い団結心と母校愛に今さらながら強く感激いたしました。志太中として設立されて以来五十五年、校名こそ幾多の変遷がありましたが、終始志太地区の中心校として名実ともに社会に有為な人材を輩出してきました藤枝東高の教育が益々充実し発展するよう同窓生一同さらに協力を深めようではありませんか。

「同窓会基金募集」二千万円の目標額を達成し、故槇田前会長の遺志に報ゆるようわたしたち同窓会役員も最後の努力をする覚悟でございます。どうか皆さまがたのご協力を重ねてお願い申しあげます。

終りに、同窓会の皆さまがたのご健康とより一層のご発展をお祈りいたします。

——旧　校　舎　玄　関——

同窓会のみなさんへ

学校長　三　浦　孝　一

本年初頭開催されました全国高校サッカー選手権大会への出場にあたりましては、全国各地で御活躍の同窓生の皆様方から心強い御激励と御芳志をいただき、厚く御礼申し上げます。

全国からの御声援にもかかわらず、不本意な結果に終りましたことを、深くお詫び申し上げます。ここに、捲土重来を期して、しぶとさのあるチームづくりに精進いたしておりますので、今後とも変らぬ御協力のほどお願い申し上げます。

さて、五十四年度の総決算ともいえる大学進学の結果につきましては、ほゞ前年なみといえますが、地元の静岡大学合格者数こそ、連続合格者数全国一位の座を他校にゆずりましたものの、旧一期校への合格者は、漸増いたしました。これらの成果をふまえ、更に文武両道に飛躍すべく学校を挙げて努力いたしております。

志榛地区の中学生急増等のため本年度入学者より一学級増員となり、三年後には全日制二十四学級に加えて定時制四学級となります。このような量的増加に合わせて、質的向上も図る必要があります。

幸い本校生徒は素質にすぐれ、人間的にも好ましい生徒が多く、将来期すべきものがあります。

これらの生徒は、やがて社会の指導者になるべきものと考えられますので、学力、体力はもとより、自ら進んで苦しみに立ち向い、他人の痛みを感じ得る真の人間に育てたいと考えております。

最後に、全国に御活躍の同窓生の御発展をお祈りいたすと共に、伸びゆく後輩と母校に対し、限りなき御支援をお願い申し上げます。

明日のサッカー部に期待

サッカー部OB会副会長　後　藤　美　喜　保

昭和五十四年度全国高校サッカー選手権大会に六年ぶりの出場とあって、学校は勿論のこと、市民卒業生は喜びと期待に湧きに湧いたのでありますが、一月四日第一戦の対宮崎工高戦で二—〇と敢え無く敗退してしまいました。全国大会出場に際しましては、多数の地元の方々、PTA、同窓生諸兄から物心両面にわたり多大の御援助をいただき、OBといたしましても心より御礼と御詫びを申し上げる次第です。特に東京都にお住まいの卒業生の方々の日夜を忘れての資金集めをはじめ、諸々のご配慮に対しまして紙面で失礼ですが、こゝに厚く御礼申し上げます。とともに今後ともお見捨てなくよろしくお願い申し上げます。

さて、いくら全国レベルが上がったとはいえ、これで藤枝が参るわけにはいきません。今年は幸いにも志太地域の優秀な選手が多数入学し、本年は勿論のこと来年、再来年と益々戦力の充実が期待出来ますが、唯、環境がよすぎて指導陣や選手、父兄に生活や練習における甘さが出るといつまでも栄冠を手にすることができないと思います。心すべきことです。県大会で優勝した、ベスト4になったそれはそれなりに価値あることですが満足すべきことではなく、そのような時点のことは皆やってきた事です。目標は唯一つ、全国制覇です。現在では日本の涯の辺地サッカーに於ても、素晴らしい指導者のもと最新の技術を取り入れ何処よりもより厳しい訓練を課し選手はそれに耐え、体力、精神力技術を鍛えに鍛えて敢然と挑戦してくるわけです。静岡だけがサッカー王国などと威張ったり安心してはいられません。それ故、一日たりとも怠けていては全国制覇などはあり得ないことです。

サッカー部OB会も内田福治会長を中心に三百八十五名の会員を擁し鉄の団結を誇っています。又本年は従来の強力なOBの技術陣に、各方面の御諒解を頂きまして第十一回卒、元全日本主将、元日軽金監督の松永信夫氏をコーチとして迎えることになりました。氏の卓抜した理論と永い豊富な経験は、必ずや母校のサッカー部の隆盛に寄与していただけるものと確信しております。これで鎌田監督をはじめとするサッカー部の指導体制、応援協力体制は益々充実しました。三浦校長先生をはじめ、諸先生方の御理解と、サッカー部後援会、PTA、同窓会、サッカー部OB会こぞっての強力な支援のもと、次はいかに選手を鍛えるかが課題であると思います。いかなる伝統校であろうとも、強靭な体力、不屈の精神力、そして卓越した技術なくしては全国制覇は無理であり、私たちOB会は一致協力してそれをやり遂げさせようとしています。同窓生の皆さん、母校サッカー部が全国優勝して国立競技場で高らかに校歌、応援歌を響かせる日を御期待くださると同時に、今後尚一層の御後援をよろしくお願い申し上げます。

県大会優勝チーム

— 昭和５４年１１月 —

思い出の恩師から (3)

回想断片

天　野　辨　一

私は、昭和五年四月から昭和二十二年三月まで志太中に、三十八年四月から四十四年三月まで藤枝東高定時制にお世話になりました。昭和五年には、錦織兵三郎先生が初代からの校長で、三回生が五年でした。精力集中、志ある者は事急を告げると、校内一体となって燃えていました。そしてその成果は広く注目されました。

こうした中に突如、思いがけない事態が起きました。昭和五年九月、錦織校長は下田の豆陽中校長に、石井午二校長が富士高女校長から来任、錦織校長の声涙共に下る離別の挨拶は印象的でした。石井校長は、志太中は新進の域からさびの重厚の時代に進んだと強調されました。そうしている内に昭和七年三月錦織校長は浜松一中校長に転出、久し振りの明るさが戻りました。このまま進めば簡単ですが、浜一中の春の運動会が昭和十一年五月行われ、その時に出された大福餅による中毒事件が天下を驚かしました。そのため錦織校長は沼津女学校長に転出、石井校長がその後に転出しました。石井校長の後には浜松師範から宇波耕策先生が見えました。宇波校長は令息を大福中毒で喪われた方でした。悲しみも超えなければの人生の厳しさでしょうか。

▼学校だより▲

年々増加する大学合格者

本年も三月に三百三十二名のものが母校を巣立っていきました。今年も九九％が進学希望で大部分が目的を果たし、全国の大学に散って行きました。

今年の大学合格者数（延数）は、国立大学百五十二名・公立大学二百八十名・私立大学百五十一名で、特に公立大学（静薬等）の数が多くなりました。又国立大学の中で難関校であると思われていた、名古屋大学・金沢大学・千葉大学・広島大学等に例年になく多数の合格者を出す事が出来ました。また一方では、共通一次試験の定着化により国立大学が合格しやすくなり、有名私立大学が非常に難化したことが目立ちました。

以上のような結果で本校生徒としては、例年どおりまずまずの結果でしたが、地域社会や先輩の要望に答えるためには、いわゆる難関大学にまだまだ多くの合格者を出さねばならないと反省しております。

いずれにしましてもこれらの卒業生が、今年も全国に広がっていきました。西も東もわからない若者達です、それぞれの地区で諸先輩のお世話になる事が多々あると思いますが、同窓の後輩としてよろしくご指導お願い致します。

最近の模擬試験風景